

神奈川大学人文学研究所編  
日高昭二責任編集  
表象としての日本

移動と越境の文化学

神奈川大学人文学研究所 出版される論文集は昨今枚  
半は、同大学外国語学部国  
際文化交流学科に属してい  
る。職場の業績作りとして  
編になる本書の執筆者の大  
半は、同大学外国語学部国  
際文化交流学科に属してい  
る。職場の業績作りとして  
編になる本書の執筆者の大  
半は、同大学外国語学部国  
際文化交流学科に属してい  
る。

試みが新鮮な成果を生ん  
だひとつの理由は、日本を  
専門領域とする研究者が、  
その延長上で、日本に外か  
ら注がれた視線と、そこに  
現れた「表象」を吟味した  
からだ。鈴木彰氏は平  
家物語専攻の立場からラフ  
カディオ・ハーンの「平家  
蟹」を読み直し、ハーンを  
別格に捉えるのではなく、  
逆に日清・日露戦役の時代  
相のなかにハーンの「エッ  
セイ」を装った短文の意図  
を想定する。編者の日高昭  
二氏は忠臣蔵への蘊蓄を基  
礎に、ミットフォードやフ  
レデリック・ティッキンス  
の Chushingura 読解  
を腑分けする。欧米側が滝  
善次郎の切腹に衝撃を受け  
たなら、坪内士行や与謝野  
寛らは欧州で珍妙な「ハラ  
キリ」翻案物に接した。『仮  
名手本忠臣蔵』の逆輸入  
品、メソフィールド『忠  
義』には、菊池寛や三田村  
鷹魚の劇評が知られるが、  
詩人の野口米次郎は、アイ  
ランド人たる著者には忠  
だった表裏に迫る。これに  
つづき山口ヨシ子氏が三ネ  
・ノグチの「朝顔鑑」を分  
析する。同時代の北米文学  
における有色人種表象のな  
かで、ノグチが実名を隠し

# 高水準の論考を揃える

対象分野の鳥瞰的布置を描くのに成功

稲賀 繁 美

違和感は、逆に外の価値観  
を理解するための試金石と  
もなる。復本一郎氏は、陸  
羯南の『日本』創刊号を正  
岡子規との関係から吟味す  
る。陸は吉野作造や竹内好  
とともに、現在中国大陸で  
思想史的研究対象として  
「合格」をもちえる、数少  
ない近代日本の（非マルク  
ス主義系）思想家。  
日本女性の表象にも、充  
実した論考が続く。まず鳥  
名乗った平安朝の「博士」  
座の旅日記を精読する。日  
付の混乱という避けがたい  
事態を「日曜日」の発見で  
克服する。八八の行状に、頭  
でっかちなボスコロ理論な  
どは無縁なまま、未知の  
世界に接して縦横に發揮さ  
れた、実利の英知と旺盛な  
好奇心の発揚を探る好論で  
あり、「米欧回覽実記」ほ  
かとは一味違った知性に密  
着する、論者の感性と船晦  
ぶりも愉快。  
すでに先行研究の堆積も  
侮れない質量を閲するな  
か、適宜註に言及し、具体  
的話題に的を絞るつつ、通  
読するに耐える配列で、論  
争口調は排した成果が過不  
足なく感服している。充実  
した論文集と評すに足り  
る。個々の論点につき逐一  
私見を指し込んで論評する  
ことは、遺憾ながら紙面が  
許さない。ただ「表象とし  
ての日本」は、すでに放送  
大学の教科書にも見られる  
題名で、二番煎じは惜しい。  
そのノグチと同年輩のジ  
ョーシ・サンソムの履歴を  
副題の「移動と越境の文化  
学」もやや手垢がついてい  
る。第一部「異言語空間の  
交錯」、第二部「異性表象  
の臨界」、第三部「異文化  
記述の場・歴史の履歴」と  
なると、並行進化論だったこ  
とが再確認される。最後に  
『仮名手本忠臣蔵』の逆輸入  
品、メソフィールド『忠  
義』には、菊池寛や三田村  
鷹魚の劇評が知られるが、  
詩人の野口米次郎は、アイ  
ランド人たる著者には忠  
だった表裏に迫る。これに  
つづき山口ヨシ子氏が三ネ  
・ノグチの「朝顔鑑」を分  
析する。同時代の北米文学  
における有色人種表象のな  
かで、ノグチが実名を隠し

越前昭氏は『蝶々夫人』の  
系譜を、ロティ、J・L・  
ロンク、ペラスコと辿り、  
蝶々さんが異教徒からキリ  
スト教徒へと脱皮すること  
で、欧州の観衆には説得性  
のある人格を獲得したもの  
の、それが長崎の地でも現  
実は一番発生し難い事態  
だった表裏に迫る。これに  
つづき山口ヨシ子氏が三ネ  
・ノグチの「朝顔鑑」を分  
析する。同時代の北米文学  
における有色人種表象のな  
かで、ノグチが実名を隠し



A5判・330頁・5880円  
御茶の水書房  
978-4-275-00818-3

★ひだか・しょうじ氏は  
神奈川大学教授・日本近  
代文学専攻。早大大学院  
修士課程修了。著書に「菊  
池寛を讀む」など。一九  
四五（昭和20）年生。